

---

# My super EXPRESS

サトウオサム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

My super EXPRESS

### 【Nコード】

N0501F

### 【作者名】

サトウオサム

### 【あらすじ】

長い受験勉強を終えたバイク乗り、中島健は、今までの人生でもっとも難しい選択を迫られた。2008/10/18\*ワードからの転載の為、装丁が崩れています修正作業を行うので、12月末まで連載を中止します。

## 東京（前書き）

特に読んでいただくに当たって何もお願いはありません  
なるべく人当たりのよい文章を目指しています。

初めて書き上げられた、ある程度のボリュームある作品です。  
どうぞお手柔らかに。

## 東京

米原が時計を見ながら、いらだたしげに言った。

「カヤの奴、どうしたんだらうな、来ないのかな？」

「なんだ、来るのか？」

俺たちは、物部カヤを待っていた、内燃機関部で一緒だったあの物部カヤだ、今更言うまでもない。

正直なところ、俺もカヤが見送りに来てくれるとは聞いていなかったが、来てくれるものだと思っていた、だからこのまま来てくれないと、結構シヨックだ。

米原が結構驚いた風に言う。

「あれ、聞いてねえの？あいつ来るって言ってただけだなあ・・・」

「案外まだ寝てたりしてな。」

言ってみると、妙なりアリティが生まれてしまった。俺たちは押し黙った。

ホームのスピーカーから、ノイズに続いて、列車の到着の10分前を知らせるアナウンスが流れた。

観念した表情の米原が特大のため息混じりに、言った。

「ついにお前ともお別れかあ、腐れ縁だと思ったんだけどな。」

腐れ縁の相手にはカラッとしたムードに、俺は精一杯の皮肉を放り出した。

「腐れて崩れたんだよ。」

（1）

「なに、それは本当か！？ウソ言いよるんじゃないあるまいな！！」

あの日、まず3週間ぶりに聴いた岡山弁の、その音量の大きさに驚いた。

「本当ですよ、なんか・・・あるですよね、俺の番号。」

電話の先からもものすごい歓声が俺の耳に突き刺さった、どうやら向こうでは少なくとも4人が電話口に待機していたらしい。興が収まるのを見計らって、俺は言った。

「先生？」

「おう、おう、ほんとーにお前はよくやったのう・・・、なんせ東京じゃけのお」

「いや・・・、あの、まあ。運と先生のおかげです、どうもありがとうございます。」

「この野郎、受かったとたん言葉遣いも東京モンになりやがってからに・・・、そうかそうか、よかったの、本当によかった・・・。」

予想外の吉事に途方に暮れる俺を尻目に、先生は機関銃のようにまくし立てる、俺は一人で考え事をしなくなった。

「じゃあ先生、自分はこれからちよっくら東京見物してから帰ります、近日中にお伺いしたいのですが・・・」

「ほうかほうか、いつでもええど、春休みはずっと学校に詰めとるけえの。」

「はい。」

終話ボタンを押して、俺は特大のため息をつくとき空を見上げた。

あれほど汚くて息が詰まると脅された東京の空は、故郷と変わらず真っ青な青空、のんきな形をした雲がこちらに微笑んでいる。

長かった、辛い一年間だった。現実逃避したくなる模試の結果、塾帰りの冷えたご飯、全部過去のこと、もう二度と味わう必要もない。

地下鉄の駅へ向かう道は大変な混みようだ、落ち込んでいる奴、今にも空へ飛んでゆきそうな奴、どのサークルにはいるかを語らう気の早い連中までいる。

さて、これから何処へ行こうか、俺は困惑した。

というのも、つい今し方俺が合格していたあの学校は、第一志望ではない。

ただお戯れに、日本人ならばその大半が人生にたった一度だけ経験する

「大学受験」というイベントの、ちょっとした余興として「受けてみた」にすぎない、冗談でやったと言ってもいい。

だからあの番号を目にするまでは

「落ちていて当然だから」と、その後の東京見物に気移りしていたが、まさか受かっているなんて・・・。

やはり何度掲示板を見直しても番号は張り出してあった、4回も確認した、けれどやはりそれは見間違えなんかではなく、俺はこの大学に合格していた。

つまり俺は、今日9時付をもって第一志望より全然上の、世の中ではその名がとどろき渡る、とある大学に合格が確定した。

「どうすりゃいいんだ？」

独りごちても、誰からの返事も、ましてや助言を求むべくもない。なにせここは仲間のいる故郷ではない、かのパリをも出し抜いた今を時めく東洋の都、東京なのだから。

顔を上げると、交差点の先の目の前の坂を、なじみの深い真っ赤なバイクが降りて来るのが見えた、俺と同じ物を見ていたであろう誰かがつぶやく。

「あ、N1」

「うるせーなあ・・・。」

さつき不幸に見舞われたのだろうか、ライオンのような頭をした黒い男が、彼ら特有のかすれた声で言った。

確かにホンダのNS-1だ、2ストロークエンジン特有の甲高い排気音を響かせてみるみる大きくなる、そして実物大の大きさにな

って俺の前を通り過ぎて大学の構内へ入っていった。甘ったるいオイルの香りが立ちこめる、この大学にあんなやんちゃな乗り物に乗ってる奴が居るのかと、少し意外に思った後に、なんだかわくわくしてきた。

何を隠そう、隠す必要もない、かくいう俺はバイク乗りなのだ。

だからどうしたと言われても困るが、こうやって他人のバイクを見て、あまつさえ排気ガスを吹きかけられて幸せを感じられるというのは、なかなかお得な事じゃないだろうか？

さつき電話口で待機していたのは、俺の担任と、そして俺たちが2年生の時まで三ない運動でご禁制だったバイクが解禁されて、その日のうちに俺たちが設立した内燃機関部の連中だ。

メンバーは、この俺中島健と、部長の米原まさはる、物部力ヤ、このたつた三人。

入りたい奴はたくさんいるけれど、入れる奴はこの三人しか居なかったというんだかワクワクするような部活だ、入れない奴のだけは根強く残る三ない運動推進派にビビったり、バイトしてバイクを維持する根性が無かったりして、指をくわえている。

俺からバイクを抜いたら何も残らない、それが俺なんだ。

ライオン頭は、自分の落ちた大学にNS-1が入っていったのが気に障ったのか、わざとらしく咳き込み、痰を吐き捨てた。ヘルメットの真横でそんなことやられたってライダーは気づきやしない、俺は誰に見せるでもなくニヤけた。

俺は、わざとらしくその甘ったるい大気を胸一杯に吸い込むと、吐き出した、まさしく一息ついたというところか、こうでもしないと「お受験」が終わらないような気もした、しかしもう、全ては終わった後だ、またあつちに戻っても、もう誰に文句を言われる筋合いもない。

オイルの香りを楽しんでいると、この香りはもの一ヶ月前には

俺の周りに満ちあふれひしめき合っていたはずなのに、俺はたった今この香りを生まれて初めて嗅いだような気分になった。

2年前、バイクに没頭しようと思蓄をため込んだ俺には、走り去った赤いNS-1がどこのオイルを使っていたのかすら解った。

信号が青に変わる頃には、あきれるほどに俺は受験生からただの男の子に戻っていた。そして、日本史の年号、数学の方程式が跋扈する頭の片隅で冷や飯を食らっていた男の子の記憶は、横断歩道を一歩進むごとに俺の脳内の覇権を握りつつあった、ヘルメットの手触り、コーナーを曲がるあのギリギリの接地感、ヘルメットの中を風が通り抜けていく音。

そうだ、ここは東京だ。すげえいいお土産が手に入るぞ、工場をやっている親戚の家はたしか南部線に乗って行けるらしいな、見物はそれからでも遅くない……。

俺はおみやげを渡した時の物部カヤのリアクションを思い浮かべながら、地下鉄の改札をくぐった。

くぐ

「おきてください。」

「あ、あ？」

「そろそろ新尾道です、起こしてって言っただじゃないツスカ。」

イントネーションのおかしい標準語が俺をたたき起こした。

俺はぐったり疲れていた、まさか川崎と東京があんなに離れているとは思わなかった。

なおかつその親戚の工場は川崎というよりはむしろ蒲田という場所にあったのも災いした、JRを降りてから親戚の工場に電話した

俺は、親戚の指示に従い、なれない川崎駅の中を歩き回り、見たこともない電車に乗って蒲田にたどり着くと、しかる後に目当てのものとの気の早い入学祝いを受け取った、その頃には余計な移動の疲労感が乗数になって俺の下半身を襲い、とても東京見物どころではなくなっていた。

おかげで足は棒のようになってしまっていて、俺は新幹線の中で博多まで乗ると同じ同じ学校の合格生（こういいう言い方でいいのかな？）と隣り合わせになったのをよいことに、泥のような爆睡をむさぼっていたという流れだ。

でも収穫はあった、そこでせしめてきた品をプレゼントする相手は、これまでにない程に狂喜乱舞するに違いない、受験と春休みでもう一ヶ月以上会っていないから余計だろう。

「お気をつけて、また東京で会いましょう。」

列車が駅のホームに滑り込むと隣の彼が言った、ウェリントンのメガネが良く似合っている、洒落た髭も生えている、コイツなら知らない人だらけの東京でもなんら支障なく生きてゆけるんじゃないだろうか、俺にその自信はない。

「あ、はあ・・・。」

生返事をして、俺はせつせと荷物を降ろしていた。

同期生になるかもしれない。そうと解ったときの隣の彼の顔はまさしく地獄に仏ということわざを体現した物のようだった。こっちはまだ東京に出るかどうかなど決めてもいないどころか、東京へ出て盆暮れだけ帰ってくるという行為を「無責任」だと決めつけている人間なので、そういう人間の形成を助長してしまった・・・、つまり浅薄な「東京モン」の孵化しかけた卵を割ってしまったような気がしてなんとなくイヤ気分になった、そして、ついカツとなって目覚まし時計に使ってしまった。

「じゃあ、また。」

俺は彼とおざなりに握手をすると、新幹線を降りた。秋葉原土産の「メイド饅頭」が怒髪天を突くほど重い。

「うわあ、尾道ってこんな田舎なんだね……。」

「日本は東京以外みんなこんなもんだろ、尾道ラーメン食おうぜ。」

「故郷」に帰ってきた、そのささやかな感動を、どうも頭の軽そうなカップルがブチ壊した。そのあまりに素直すぎる感情表現に機嫌を損ねたのはどうも俺だけではないらしく、二十歳ぐらいのハンチングをかぶった男が、阿吽の彫刻のような表情で2人をにらんでいた。

でも、俺が東京で生まれ育った人間だったら、このラーメンと造船ぐらいしかない「尾道」という地域を「うわあ、きれいな田舎だなあ。」ぐらいにしか思わないのかもしれない。

それでも俺は東京に出たかった訳じゃない、それは浅薄な奴がすることだと思っていた、だから俺はこの街に残ることを選び、第一志望は家から通える地元の大学にした、そのはずなのに……。

何故か、その選択に大きな落とし穴があるような気がし始めた。

具体的に言うと、第一志望の選択が本心からではなく、「バカな都会もん」という有りもしない典型例に対するアンチから出ているような気がし始めた。

そしてふと、ホームから列車を見ると、ウエリントングラスの彼が手を振っている、お前はポン引きか、偏頭痛になりそうだ。

そこでシカトできない俺も俺だけれど……。

くっ

新幹線は東京という桃源郷に思いを馳せる彼を乗せ、博多へ向けて出発してしまった、手元の携帯には彼の電話番号とアドレスがしっかりと保存されている。

もの一時間もすれば、彼は地元の友達に自慢話の花を咲かせるんだろう。

さてこれからどうしようか、タクシーを呼ぼうか、なんせ偏差値が64以上の大学に合格したんだ、お袋も上機嫌だろうから怒られる事はまずないはずだ、新幹線との接続なんて微塵も考えちゃいなバスになんて乗ってられない。

俺は目の前で駅名の看板を写真に収めようとするさっきのカップルに辟易しつつ「写真とつてもらえませんか」と、拒否不可能なお願いをされないうちに退散しようと思いを早めた、階段にさしかかる辺りで携帯電話が震えた。

「健ちゃん、あんた今どこにいる？電車が見えるところにはいないかな？」

川崎でせしめたパーツを、一番欲しがってるであろうヤツからだ、半笑いだ。

「な、なんでわかるんだ？」

「なーに、こつちから丸見えなんだよ。」  
「なんだって？」

俺は携帯電話のマイクを抑えて、周りを見渡した。同じホームには誰もいないようだ、とすると上りのホームか？俺は荷物を背負って立ち上がり、上りのホームにも目を凝らした、まだウロついていたカップルが俺を見て怪訝な顔をしている、日本というのは一人であるとも悪い印象をもたれる国だ。

「違うよ、こつちこつち。」

スピーカーから声が漏れた、からかわれているんだろっか・・・、まてよ、だとしたら、あいつはなんで俺が駅にいることを知ってるんだ？

「後ろだ！うしろ！」

ピンと来た俺は、ホームの海側に駆け寄って、ロータリーを目を皿のようにして眺めた。

「おかえりい、待ってたぜ。」

その君、物部力ヤが、愛車のNSRによっかかって、こちらを見上げていた。

ロータリーに出ると、カヤが手を振ってくれた、わかりやすい。

「お前が迎えに来てくれるとは思わなかったよ。」

「米原も来たがってたんだけどね、予定入っちゃったって。」

「そうか、じゃあこれ、おみやげ。」

「なんだこれ・・・おお！」

脱いだヘルメットをシートに置くのも早々に、カヤは俺のおみやげにかぶりついた。

「え、ちよつとまって、これすげえ・・・これがあれば、NSR、あと10年は走れるよ。」

「川崎に住んでるおじさんがその場で作ってくれたんだよ、あれだけ探しても無かったのに、目の前に出てくるとあつけないよな。」

「ホント、ホンダに電話したらいい回しにされたっけ。」

「ああ、そんなこともあったな。」

まるで、昨日のことだ、メールをしても電話をしても、問屋に問い合わせても梨のつぶて、そんなパーツが、今目の前にある。自分で言うのもなんだけど、最高のおみやげになったと思う。

（5）

それから俺は。駅前からはカヤのNSRに乗って一端俺の家まで帰り、それから自分のガンマで学校に向かった、学校に着いてから数分もしないうちに、用事を終えて帰ってきた米原を含め俺たちいつもの3人は部室にたむろして、いつもとは少し違う、いつも通りのとりとめもない会話に落ち着いていた。

「カンニングしたんだろ？」

「失礼な！」

「ケンちゃん、キミは不正な手段を使って、インチキなスコアを出そうとはしていないか？」

「違う！」

「・・・それは最低な行為だぞ？要ハサミだ、61！」

お互い受験というタガのはずれた俺たちはひとしきり笑った、い

つ聞いてもカヤは女なのにメタルギアの大佐の真似が上手い。

お互いこの2ヶ月程あっていないというのに喋る喋る、どこから沸いてくるのか、話題は尽きない、しかし5分前に何を喋っていたかを聞いても誰も覚えていなさそうだ。これもいつも通り。

そんな話の中で、唯一覚えているのがコレ。

「合格祝いもかねて、ツーリングにいきましょう！」

合格祝いと何を兼ねているのかはよく解らないけれど、カヤはそう言つて、俺と米原の前にルーズリーフを三枚差し出した、全部同じ内容だった、全部手書きだ。

「何で手書きなの？」

そう言つと、カヤは顔を真っ赤にして頭を掻きながら、真っ黒くなったA4の紙を2枚を差し出した。

「使つただけどさ……。」

トナーがダダ漏れになっていたのか、間違つて闇夜に真っ黒な牛を引きずり出す絵をコピーしてしまったのかは定かではないが、なんせ紙は真っ黒だった、俺と米原は顔を見合わせた。俺たちはこいつが整備したバイクに乗っていたのか……。

カヤの家はバイク屋だ、物部二輪、カヤの親父さんの代からで、レースにもメカニックとして参加している、カヤはその家の一人っ子、こうしてみてもここにいる3人は、全員一人っ子だ。

それはいいとして、俺たち内燃機関部のメンツは、それをいいことに物部二輪をピット代わりに使っている、もちろんパーツ代は払うけれども、時には現役レースメカニックの指導付きで自分のバイクを整備できるのは、バイク大国日本にバイク多しと言つてもこの物部二輪をおいて他にはないだろう。

カヤも当然親父の影響を受けて女だてらにバイクマニアだ、NSRの最終型に乗っている、カヤはこの3人中じゃ一番バイクのメカ方面に強い、俺のガンマは基本カヤに任せきりだ、米原はタイヤとチェーンの交換は自分でやっているけれど、クラッチや腰下は全

部力ヤに任せている、ちなみに米原の愛車はヤマハのRZ250。

自分で言うのも何だが全く酔狂な連中だ、全員が全員、雁首そろえて2ストロークレプリカとは。

本当はもつとこの愉快的なバイクサークルについて話していたいけど、それはまた別の機会にして、話を進める、話し出すと止まらないほど、今までにはおもしろい事がいろいろあったんだ、これが。

「よし、そんじゃあ内燃機関部、次の集合は2月20日な。」

「おーす。」

その日はそんな風にして、特に誰の家にも寄ることもなく別れた。

## 東京（後書き）

バイク乗りってどういうこと？　どういう人がバイク乗りなんだろう。

ふと浮かんできたそういう荒削りな感情にまかせて書きました

そのほかのシチュエーションなどに関しては、完全に自分の好みです  
特に深い意味はありません。

ジャンルを何にしようか迷いました

改めて読むと相当頭の軽い文章ですね、ごめんなさい。

## 岡山

（ ）  
それで、あさつてがそのツーリング当日。

すべてから解放された、イヤな事は何もなくなっていい、せいぜい朝親父の出勤とともにたたき起こされる位だ、そして何よりも、明後日はいつものメンバーとつるんでのツーリング。

小学校の遠足の前日ぐらいにテンションがあがっていても良さそうなものだけれど、こうして今俺が座っている夕食の食卓では、そこどころではない光景が繰り広げられている、それも今日に限ったことではない、家族3人の団らんとなる夕食の場面においては、俺が東京から帰ってきたあの日以来毎日こんな光景が繰り広げられている。

「一番好きなのところに行かせてやるのが、一番ケンの幸せにかなったろうが！」

「何言ってるのよ、それとコレとは訳が違う、もう将来が約束されたようなもんなんよ？」

「だからって、親戚も友達も居ない所にいきなりほっぴり出すなんて、なあケン？」

「。。。。」  
あえて俺は返事をしなかった、親父と眼があっても努めて視線を逸らす。

商社マンの親父は、このまま岡山にある学校へ行くと、帰ってきてから何度も何度も、恐らく俺の顔を見る回数に2乗しただけ言ってきた、一方お袋はというと、これまた同じく東京の学校へゆけという。

「だって、名門もいいところじゃない、首相も輩出してるし、政界には相当太いパイプがあるのよ、だったらOB会の力だって強いだ

ろうし……。」

というのが、主な理由で、そのほかにも

「東京で洗練されたセンス」を学べとか、「偏差値ではなく格の問題」だとか、失礼だが学歴なんかとは縁遠いはずのお袋が、今や我が家の超現実主義の総合商社のような顔をして、俺に圧力を加えつつある。

最初は俺も親父の言うことに賛成だった、しつこいほどに言われたこともあったけれど、なによりせっかく仲良くあの2人と合格したというのに、それをむざむざ捨てるのは惜しいと思ったからだ。

俺の大学受験は別に東京に行くためでもなければ政界に首をつっこむ為でもなく、正直なところあの二人について行くという意味の方が、強いような気がしてきた、東京であるの番号を見つけたときに気づいたその事実は、親父とお袋の論戦を観戦する度に、確信へと変わりつつあった。

そしてそれは、俺を親父の側から、お袋の側へとなびくようにし向けるには十分以上の説得力を持っていた、ともかく、俺が帰ってきたから毎晩のように繰り返されるこの問答に、俺は少々嫌気がさしていた、明後日を直に楽しみに出来ないのはこの毎晩繰り返される舌戦のせいなのだ。

俺は席を立った。

「ごちそうさま！」

「まだ話は終わってないぞ。」

「うるさいなあ、俺は寝る。」

「おい……。」

後ろ手にリビングの扉を閉めると、あの議論が再開された。

朝生もしつぽを巻く白熱具合だ、二人とも、俺の事なんて関係ないんじゃないのか？

未練がましく磨りガラスの向こう側を見る俺の胸に、そんな手前上手なメンタルが芽生える、でも、そんなはずはない、あの二人は俺

の親であつて俺の幸せを考えないはずがない、二人は形は違えど、それぞれ俺の幸せを案じているのには間違いない、手段と目的が交錯することなんて親とはいえ人の子だ、俺はイヤというほどそう言う目に遭つてる。

もしも俺のこの考えを甘ちゃんだと思つたら、それは結構身勝手すぎる考えだ、死ぬまで反抗期を続ける事になりかねない。

「・・・たくよー。」

俺はながら作業で部屋の扉を開けた、頭の中がいつぱいだ、親父とお袋の考える幸せのギャップがどうこうというより、今一番手を焼いているのは、自分がどうしたいかがだんだん読めなくなってきたことだった。

気づくと俺は椅子に座つて「萌える単語帳」を広げていた、どうやらこの間まで相当必死に受験勉強にいそしんでいたようだ、こんな行動がルーチンワーク化されているとは、世も末だ。

ふと目をやったふとんの上で携帯電話が光っていた、メールが届いている、米原からだ。

「なにになに・・・」

明日会わないかつて、どうしたんだらう改まって。

「おろ、どうしたの早起きして。」

玄関で靴のひもを結んでいると、お袋が台所から顔を出してきた。

「寝言は寝たまんま言ってくれよ、今日はミーティングなんだよ。」

「あ、そうか、朝ご飯いらなんだったわね、なんだ、せつかくいいあじの開き入ったのに。」

「・・・なら、私も貰おう。」

「何度も言っけどその波平さんのマネ、にてないわよ。」

数分後、俺はあじの開きに舌鼓より数段格上の「舌キック」を打ち鳴らし、朝ご飯にありついていて、待ち合わせには完全に遅刻だ、とはいえその連絡を入れた時米原はまだ布団の中にいたんだからおあいこという物だ。

「そんなに急いで食べなくても、骨がつかえるわよ。」

「こんな美味しい物出すのが悪い。」

「ありがたいお言葉。」

「そのほう腕を上げたな。」

お袋は苦笑いすると、立ち上がって沸いたヤカンから急須にお湯を注いだ、いい香りだ、17年来ずつとうちには玄米茶だけれど、飽きが来ない。

「ねえあなた、本当に東京に行く気はないの？」

訂正、このメシまずい。

「母あさん、朝っぱらからそう言う話はやめてくんないかな。」

「朝も夜もあつたもんじゃないわ、重大な問題なのよ、これは。」

重大な問題、というのはお袋の座右の銘で、これにかかれればスクーターかっ飛ばして安売りに飛んでゆくのも重大な問題になってしまっ、まあ、今回は本来の意味で言ったんだらうけど。

俺は大いに機嫌を損ねて、背もたれに身を任せた。

「そうはいうけどさあ。」

「東京、気に入らなかつたの？」

「そう言う訳じゃないけど・・・。」

目の前のアジの開きが「掛かつたな」と言った気がした、どうやらお袋は最初からこの話をするつもりだったらしい、飯でつられた自分がほとほと情けない。

「まあ、こういう言い方するとあなたは気に入らないかも知れないけど、私はあんたのためになると思っていつてるんだから、ちよつとは聞いておきなさい。」

「ちよつとつてねえ母さん、東京と岡山は700キロも離れてんのよ？じゃあ間を取って名古屋にしましようなんて訳にはいかないだから。」

「そう言う問題じゃないわ。」

「じゃあどういふ問題だつちゆうんじゃ。」

「だからね、よく聞きなさい、あなたのお父さんだつてああ見えたつて今までに大変な苦労してんのよ？旧帝大出なのに。」

「ああ。」

少し、心が揺らいだ気がした、いやダメだ、今度こそは誰の意見でもなく、俺自身の考えで決めると決めたはずだ。

それなのに親父から聞かされる愚痴話に、職場の学閥の話題がチラつくの思い出して、俺の心は横風を受けたバイクのように危うくよろけた。

「私、みすみす手に入れた将来をパイにするのは、あまり賢い選択じゃないと思うんだけど。」

「いいよ、俺かしくくないもん。」

本音は、米原やカヤといった、あの内燃機関部の連中と離れたくないというだけだ、我ながら情けない理由もあつたものだとは思うけど、一番有力で説得力のある理由だ、あくまで自分的にだけけれど、  
「賢くない人間があんな大学に受かるもんですか。」

「運だよ、あんなもん、ガラガラポンで決まる。」

俺は商店街のくじびきのジェスチュアを試してみた、そういえばあれ、正式名称はなんて言うんだろう、まあどうでもいいか。こうして俺はまた一つ賢くなるチャンスを逃した。

「なにをおっしやい、ガラガラポンならあんた今頃みんな落ちてるわよ、くじ運悪いんだから。」

そういつと今度はお袋が抽選器を回す手の動きをした。

ああもう、こりゃ空想に逃げるしかないな、そういえば、俺がカヤと出会ったのも抽選会の時だったな、中学1年の春だ。

「ちえー、またティツシュかよ。」

説明するまでもない、俺たちは抽選器を回していた、謎の一等賞を指して。

「お前本当にくじ運悪いんだな、どりゃ、俺が一丁回してやる・・・お？」

米原が強引に俺から奪った抽選器は、その口から残念賞の赤色ではない、無駄に輝く金の球をはき出した。

「あ・・・あ・・・あたったあああああ！！！」

物部二輪の前が抽選会場だった、店の手伝いでそこにいた女の子がカヤだったんだ。

「何、何！何がもらえるんだよ。」

「落ちて着け米原、俺の抽選券だ。」

「回したのは俺だ。」

「なにを！」

カヤは、やれやれこれだから野郎のガキは。とでも言いたそうな顔つきで俺たちの間に割って入った。

「まあまあ二人とも・・・。そんなとりあわなくっても、当たったのはバイク用のグローブ、ほい。」

米原の表情から一気に熱が引いた。

「なーんだ、ケン、お前にやる、そのNSRをもらえるのかと思  
ったのになー、なあ？ケン」

「いらねーよ、俺はバイクなんて、んな危ない乗り物には乗らない  
の。」

こちらを「ガキ」と見下してかかっていたカヤの表情に、今度は  
熱が入った。

「え？あなたバイク嫌いなのか？」

カヤは珍しい生き物でも見るような顔で俺を見た、上から下から  
右見て左見て、なめまわすように。

実はこれが私のバイクとの出会いなんです。

なんて言ったら怒られるだろうけど、残念ながらこれが真相であ  
り、この物語の大本であり根幹であり屋台骨なのだ、イヤなら帰っ  
て結構。

で、一目惚れしたカヤがバイク屋の娘で、バイクに乗っていて、  
俺がメカ好きの女の子に憧れていたというだけの話。

「それに比べて米原くんはお目が高い。」

「だろお。」

「おいおいちよっと待ってくれよ、お前ら知り合いなのか？それに  
なんだ、男だからバイク乗らなきゃならねえってのも妙な話じゃね  
えか。」

そうは言いながらも、俺の頭の中はグチャグチャのメロメロに混  
乱していた。

そのときの心境を何か別のわかりやすいシチュエーションで表す  
とすれば、正面に居たトラックの右折を待っていたら、突然空から  
戦闘機が降ってきたと言うところだろうか、よけい解りづらくなっ  
た。

つまりこうだ、その日まで俺の中にバイクという物が毛先の程も無かったわけではない、積極的に否定する対象だったわけでもない。つるんでいる米原は親父に連れられてサーキットに行つて走るぐらゐのバイク狂だったわけだし。

ただあえてバイクに興味を抱かなかつた理由を今から考えてみると、それは俺の持つ米原以外の人間関係にあつたと思う。

俺はカヤとバイクに出会つた後も中学2年生になるまでずっと

「電算機研究部」という、名前だけコアなナードコア集団の中に居た。その実18禁のエロゲーを共有し、データ化したアニメを見萌えバブルの興隆に自分の趣味がとうとう昇華し

あたかも雲上の人になつたかのような錯覚に溺れた紛う方無きネクラマツチヨの集団だつたのだ。

説明が長くなつた、本編に戻ろう。

カヤは両手を組んで、俺の前に立ちはだかつた、俺は好きな子に意地悪をするタイプなので、粋がつてポケットに手を入れて、三白眼でカヤをにらんでいたものの、すぐにもお友達になりたい気分だつた。

「妙じゃないわよ、それにここはバイク屋の前だよ？ちつたあオブラートに包みなさいよ。」

「そうだよ、バカ。」

今、米原からものすごく上手い崩しが入つた。そう判断した俺は、腰を低く保ち、言つた。

「あ、そう・・・じゃあ、半分コ。」

米原は何も言わずそれを受け取ると、俺の雰囲気を探してか、こう言つた。

「物部はな、隣のクラスだ。」

「世間つて狭いよお。」

カヤは白い歯を見せて笑つた、ここで、見たことある顔が完全に好きな顔に変わった。

内燃機関部のメンツがそろったのは、実は中学1年生での出来事という事になる、ここから俺たちはつかず離れず、同じ高校に入り、公道でバイクに乗れる年齢になり、内燃機関部を設立する頃には全員免許を持っていた。

ちなみにそれ以来、俺と米原は今でも半分こしたグローブを使っている。

「あんた聞いているの？」

「はい？」

「なんか変よ、ぼーっとして、起きてる？」

「起きてますよ。」

突然熟女の顔が目の前に出てきたと思ったらお袋の顔だった。

「まあ、なんにせよよく考えて、悔いの無いようにしなさいね。」

「はい……。」

悔いの無いように、か……。そう言われるとよけい悔いが残るんだよね実際。

俺は二十分前とまた同じ作業に戻っていた、スケートシューズというのはタンの下で結び目を作るのがツウだとか、米原に習った、米原は俺のバイクの師であると同時にファッションや音楽、その他諸々の先輩だと言っている。

どうしてそんなにマメに人付き合いが出来るのか不思議になる人脈の広さは常に俺や、時にはカヤにさえ目新しい情報を提供し、楽しませる。

左足の甲の部分がチェンジレバーのせいで目も当てられないような状況になっているバンズのTNT2のヒモを、やはり米原の言うとおりタンの下で結び終えると、米原がこれを見てこんなことを言っていたのを思い出した。

「ハードコアでいいじゃない、スケーターに見せたらうらやましが  
るぜ？」

「なんで？」

「リフ（ボードと一緒に飛ぶアレ）に失敗してこうなったと思われるからだよ。」

「・・・それってすごいのか？」

「一応かつこいって事になってる。」

無難なビグスクやアメリカンのあふれるこのご時世に2ストロークレプリカで目を三角にして走り回る高校生というのは、確かにハードコアに違いないが、かつこよさというのは非常にデリケートな物らしいというのが、ファクションに疎い俺にもよく解る出来事だった？なんのこっちゃ。

また、お袋が近寄ってきた、今度は何だ。

「あ、ちよっと。」

「なんだよ、もうその手には乗らないぞ。」

「違うわよ、これ、カヤちゃんちに届けてきて。」

「なんだこりゃ。」

お袋が差し出したのは小さな紙袋、虎屋のヨーカンと書いてある。

「うわ、美味そう。」

「食べるもんなら食ってみなさいよ。」

紙袋を受け取った右手がぐんと下がった、中身を見てみるとヨーカンではなく靴が入っていた、カヤが油で汚れるピット用に履いていたコンバースだ。

「あの子がこの間うちに来たときに忘れていったのよ、届けてあげて。」

「あ、納得。」

「食べちゃダメよ。」

こんなガソリンくさい物を食う息子なのか俺は、そうなのか。

それにしてもあいつ、何でうちなんかに来たんだ、しかも俺の居な  
いときに。

素朴ながら当然の疑問がわいてきたのは、駅前の交差点で信号待ち  
をしているときだった、解決するのは、また先の話になる。

岡山 2・26 (後書き)

この文章はOooWriterで執筆しているのですが  
やはり書式がおかしくなっていますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0501f/>

---

My super EXPRESS

2010年10月28日07時49分発行